

ラプレター

2018年
11月号
Vol. 63

■宅地（戸建）

～戸建プロジェクト続々始動！～

- New!! プロスベリテ別府
1区画 近日公開!
- New!! プロスベリテ飯倉
1区画 近日公開!
- New!! プロスベリテ福重
4区画 近日公開!
- New!! プロスベリテ機手II
6区画 近日公開!
- New!! プロスベリテ福浜
2区画 近日公開!

■新築分譲マンション(販売受託)

- レジデンシャル武蔵ヶ丘
総戸数70戸 好評分譲中!
URL <http://634-mkn.jp/>
- プランシエラ高宮五丁目
高宮駅徒歩3分 総戸数15戸
好評分譲中!
URL <http://www.takamiya5.jp/>

発行：株式会社ラプロス
発行人：代表取締役 樋口繁樹
〒810-0001
福岡市中央区天神1丁目
12番1号 日之出福岡ビル5階
TEL092-737-2211
FAX092-737-2212
弊社のHPは下記URLよりご覧いただけます。
<http://www.lapros.co.jp/>



近年の震災・豪雨による被害にあわれた方々には、謹んでお見舞い申し上げますと共に、被災地の一日も早い復旧を心より祈念いたします。
私たちラプロスは、できることから被災地への復興支援に貢献をしたいと思っております。



秋のラプレター お届けいたします

中学生～14歳の天才

という題名をつけたら、皆さんは将棋の藤井聡太七段、卓球の張本智和選手、サッカーの久保建英選手あたりをすぐに思い浮かべるかもしれません。僕の今年の目標の一つは読書60冊だったのですが、出会ってしまいました、凄い中学生に。鈴木るりか著『さよなら田中さん』昨年秋に刊行された本で、なんでも3年連続で小学館の「12才の文学賞」を受賞した女の子です。掛け値なしにこの本は面白いです。母一人娘一人、世間の荒波にもまれて苦勞を重ねて…昔のNHK連続ドラマ『おしん』のような涙ホロリの物語ーかと思いきや、極貧の状況を明るく楽しげに日々を送って生き抜いていく、他人をきちんと前向きにリスペクトできる主人公の小学6年生田中花実ちゃん繰り広げる数々の日常的ドラマ。ちびまる子ちゃんやサザエさんが好きな方は必ずハマると思います。花実ちゃんのお母さんがまた个性的で凄い！強烈に逞しく明るい母ちゃん(しかも想像するに日に焼けてボサボサで化粧っ気もないけど多分僕の想像では美人のはず…)なのです。世話好き大家さんの紹介の見合いで思わぬ展開に二人が巻き込まれかけたり、ぼったり出くわした花実ちゃんと同級生がふらふらと橋から身を投げそうなどこ

住まいは暮らしの原点です 文：大崎

ご存知のことと思いますが、五感とは視覚（見る）、聴覚（聞く）、触覚、（さわる）、嗅覚（におう）、味覚（あじわう）で、中でも視覚は60%、聴覚が20%の情報入手し、残り20%を触覚、嗅覚、味覚で入手します。それ以外にも第6感（予感）というものも有りますが、これは人によって働く人と、にぶい人が有るようです。しかし結果としての判断は個人差があり、良し悪しは全く別のものです。

では、住まいをどのように考えたらいいのでしょうか。五感で考えれば、そこに居るだけで心地よく安らぐ空間がある気持ち良さを感じられる住まい、ではないのでしょうか。今、住宅は、キッチン、洗面所、浴室、の設備機器はもとより室内の空調等についても機械がコントロールを行っています。便利な時代になっていますねー。元々、四季が有る日本の住まいは季節・気候に合わせて呼吸するよ

ろを二人で助けたり。でも、ウルっとくるようなところも随所にありで。次に書く本も是非読みたい！

アスリートや将棋の天才中学生が日々のストイックなまでの練習や努力の積み重ねで天賦の才を伸ばしていくストーリーとかドキュメントにも同時代を生きていて感動しますが、15歳でこの想像力、構成力と平易な語彙力（難しい言葉ではなく平たい皆が使う言葉で分かり易く情景を思い浮かばせる技法というか文章力）の豊富さに、作家あさのあつこも感動した、というこの小説、是非読んでみてください！

中学生ですから、プロの作家のように当面次から次へと新作は刊行できないでしょうが、次作が楽しみです。何しろ原稿を書くときは、集中すると次から次へと言葉が浮かんでくるそうです。好きな作家は志賀直哉とか。

読書の秋真っ盛りです。これは、という本の情報は是非ラプレター編集部？までご紹介ください！以上、小学館からの回し者ー樋口のコラムでした～。



代表取締役 樋口繁樹

うに造られていましたが、今は機器の発達とともに機器が有効に働くように考えて造られています。言い換えればまず箱を作り、これに何を入れようかではなく入れるものが先にあり、それに合う箱を作る様な感じがします。これはこれで効率的で良い事ですが、家の中で自然を感じることはますます薄くなってきた様に思われます。

今、昔のような日本家屋を建てることは金銭的には、難しい（難しくない方も沢山おられます）ことかもしれませんので、五感をしっかり働かせるため、庭に沢山の植物を植え、住戸内に花鉢などを置き、出来るだけ自然にふれあって生活しましょう。



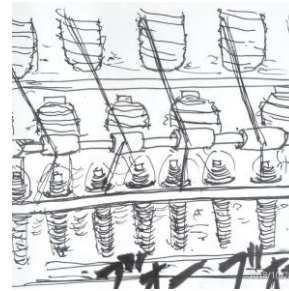
■ラプロス流 免許皆伝 その43『大人の社会科見学』の巻 文：アラキ

毎度おなじみ私アラキの戸建てへの思いをつらねるこのコーナー、今回で43回目となりました。10月は珍しく出張が続きました。あまり出張が続くと仕事が進まなくて困るのですが、今の時代はスマホがあると便利です。メールの送受信だけでなく、仕事の資料をダウンロードしてコンビニで印刷したり、図面チェックやスケッチを写真に撮って先方にメールしたりできます。この原稿もスマホにキーボードを接続して、音楽を聴きながら機上で書いています。今回はそんな出張中、仕事の合間に見聞したことなど。

月はじめに訪れた鹿児島では、大河ドラマ「西郷どん」で盛り上がっています。時間ができたので西郷隆盛展を見に博物館へ。展示されている資料の量と内容の凄さに圧倒され、ひとつひとつ感心しながら見ていくと2時間かかっても見切れません。隆盛はご存じのとおり不名誉な方たちで最期を迎えてしまいましたが、死後、明治22年に明治天皇から正三位を与えられ名誉を回復しました。天皇の朱印が押された、正三位を追贈する証が展示されていたのです。涙がでるほど感動しました。

翌週は神戸、名古屋へ出張でした。名古屋でも時間が空いたので（わざとじゃありませんよ）、トヨタ産業技術記念館に行ってきました。西郷隆盛展の教訓から、チケット売りのおねえさんに見るのにどれくらいかかりますか？と尋ねたところ、1時間くらいと聞いて入場。

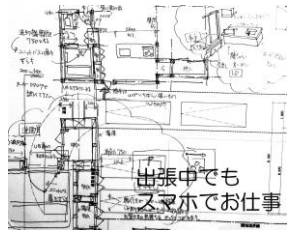
トヨタは自動車メーカーとして有名ですが、創業は紡績機械、つまり糸を紡ぎ布を織る機械をつくる事業からスタートしています。展示室に入ると、綿花からわたを摘み、そこから糸を手で紡ぐ実演から始まります。時代を追っていく展示となっていて、手から道具へ、やがて機械へと進化していく様子がよくわかりました。すごいのは、展示されている60年前、80年前のたくさんの機械たちが、スイッチを入れると動く状態になっているのです。ガイドさんが説明しながら実際に機械を動かし、できた糸を触らせてもらえるのです。無表情な鉄の機械が、小さな部品ひとつひとつがいっしょうけんめいに働き、綿から糸を紡ぎ出しひとつひとつの糸巻きがだんだんと太くなっていく様子は、古い機械好きのアラキにとっては鳥肌ものでした。



続く布づくりのコーナーは、木製の機織り機から始まります。ボタンボタンと両手両足を使って1反の布を織るのに、当時は二日半もかかっていたそうです。それを豊田佐吉は両手ではなく片手と両足で織ることができる機械を発明し、1反を一日半でできるようにしたそうです。作業効率は1.6倍。それがどんなに働く人を楽にしたことか！横糸を自動で継ぎ足す発明、縦糸が切れたときに自動で停止する装置、人力から動力への変換と、たくさんの工夫と技術が注がれ、布を織ることは手工業から産業へと発展していくのです。ここでも古い機械を実際に動かして、布を織るのを見せてくれます。すでに1時間を軽く超過。自動車づくりの歴史もゆっくり見たかったのですが、紡績機械の展示がはるかに興味深く、逆に電子制御だらけになってしまった自動車の歴史はつまらなく感じてしまったのは、古いもの好きのアラキの嗜好なのでしょうね。

月末には東京へ。あるゼネコンのマンションミュージアムを見学しました。日本の共同住宅は、関東大震災を契機とした不燃化への取り組みと、戦後の都心部への人口集中による土地活用の効率化という目的で発展していきました。やがてマンションと呼ばれるようになっていくその歴史や、現在の施工技術、近未来の暮らしを紹介しています。住まいは、私たちがもっとも大切とする家族と財産の安全を守る最小限の器。それが時代を追うごとにだんだんと機能的に、そしてゆとり、豊かさをもったものと発展してきた様子は、私たちが取り組んでいる仕事の意義を改めて示してくれました。

3つの都市を訪れ、見てきたものは異なりますが、その時代時代で人々が取り組んだものは、今の私たちの暮らしを豊かにしてくれています。人が行うことには、どんなものにも無駄はない。何かをつくり出すことが幸せをつくる。そう信じていきたいと思った、大人の社会科見学でした。



少し早い気もしますが、、、、 文：山口

暑かった夏が嘘のように冷たい空気が漂うこの頃。私の頭によぎるのは少し早い気もしますが来月のクリスマスです。クリスマスと言えばサンタさんですね。サンタさんでよく話題になるのが、『いつまでサンタさんを信じていたか？』ではないでしょうか。この話題については、十人十色のエピソードがあると思います。今回は私のエピソードをお話しします。

あれは、私が6歳のこと。まだピカピカの1年生をやっていた時の話です。今年は何をサンタさんにお願いしようかと一生懸命に考えていました。帰宅して家族とご飯を食べていると、父が私に笑顔で「サンタさんに何を願うのか決めた？」と聞いてきました。私が声を出す前に、「暖かい靴下とか、手袋とかがいいんじゃない？」と母が予算内に収めようとポーカーフェイスで言いました。そんな駆け引きの中、自分の願いを両親に告げました。すると母が「いい子にしてたらね」。どうやら稟議は通った模様。こんな他愛もない会話が交わされていたような気がします。

問題はその後でした。数日後、テレビをつけると某ドキュメンタリー番組が流れていました。外国で何やらサンタさんのコスプレイヤーらしき人達がベルトコンベアに大きな白い袋を流していました。そして次の瞬間、コスプレイヤーの一人が顔面だけさらして言いました。「早く仕事を終わらせて息子にクリスマスプレゼントを届けたいよ、きっと喜んでくれると思うな」。勘は鋭くても空気の読めない私は両親に聞きました。「サンタさんって本当はダディ（パパ？）だったんだね」。両親はなんとも言えない表情で苦笑いをしていました。

クリスマスがやって来ました。私は父がプレゼントを私の寝床に忍ばせてくるのをただひたすら目をつぶって待ちました。大人の階段をのぼってしまった私には、いつものワクワク感はありません。しかし、枕元にプレゼントを忍ばせてきたお父さんサンタの顔を薄目で確認したときの嬉しそうな表情は、薄らではありますが、いまだに幼い頃の良い思い出として私の記憶に残っています。

皆様はいつまで信じて、そしてどんなエピソードをお持ちでしょうか。家族や友人、恋人にエピソードを話してみると意外に盛り上がるかもしれません。

編集後記

文：山口

食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋など、秋は楽しいことがたくさんあってまったく飽きないですね。・・・おや？冬がやってきたようですね。特に朝晩は冷え込みますので、皆様ご体調にはお気を付けくださいませ。